

村井椿寿(琴山)と吉益東洞

松崎 範子

熊本大学医学部同窓会「熊杏会」

受付：平成30年5月10日／受理：平成30年10月3日

要旨：村井椿寿(号；琴山)は、吉益東洞門下を代表する古方派医師として知られる。宝暦期には、熊本藩の医学校再春館の創設にあたり、父見朴とともに、その基礎を築いた。しかしすぐに見朴が死去したため、医学校を辞職して京に行き、吉益東洞門下となった。東洞のもとでは、いくつもの医学書を出版するまでに成果をあげた。東洞の死去後は、熊本で家塾を開いて、多くの塾生に東洞流の医術を教授した。本稿ではこれまで知られていなかった椿寿の門人名簿をもとに、椿寿の門人について明らかにした。そして九州出身である椿寿に東洞が願ったことは、西日本地域を中心に東洞流の医術を広げることであったが、この願いが椿寿の家塾で実現されたことを具体的に示した。

キーワード：村井椿寿(号；琴山)、吉益東洞、東洞流、門人、医書

1. はじめに

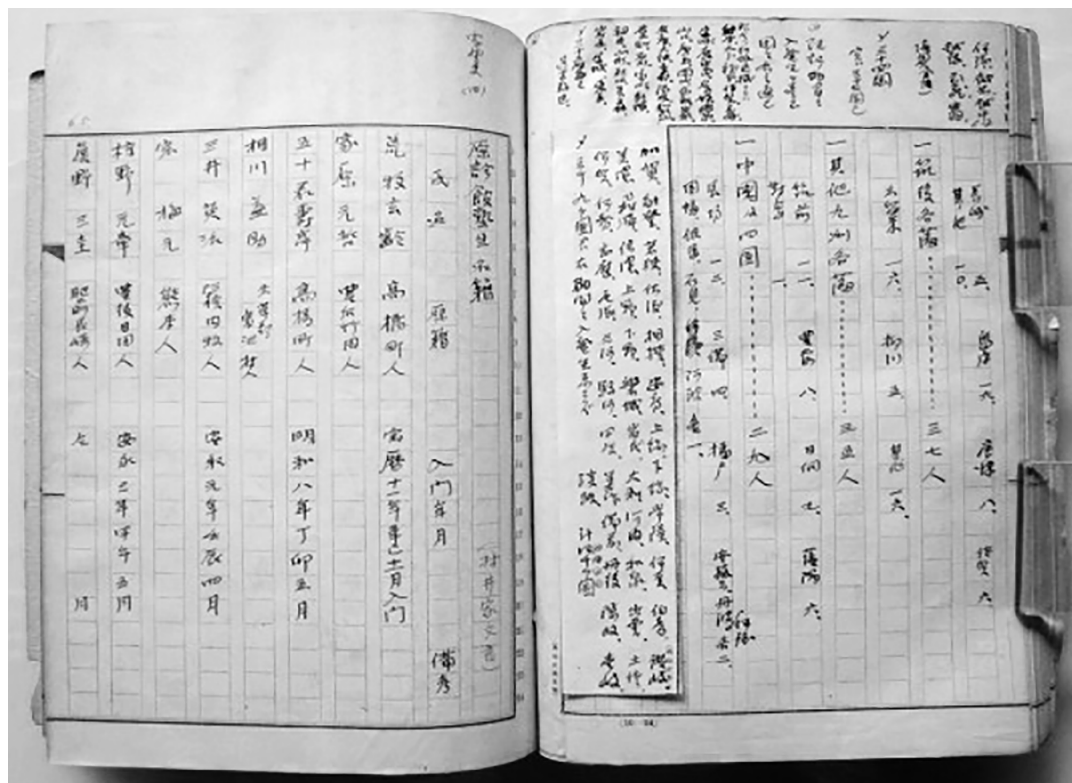
近世中期の医界では多数の古方派医師が輩出されて、医論を展開している。その一人が吉益東洞で、東洞流の医術は日本の漢方医学を体系づけたとされる。この東洞門下の第一人者といわれるのが、江戸の岑少翁と肥後の村井椿寿(号；琴山)である。本稿では村井椿寿に焦点を当て、その医書の出版と家塾の成功をもとに、東洞流の九州を中心とする西南地域への展開について究明するものである。

椿寿は、熊本藩の医学寮再春館の初代教授村井見朴の長子である。医学校創設にあたっては、盲目の父を支えて基礎を築いた。しかし椿寿の医学校在職期間は宝暦7年(1757)から同12年と短い¹⁾。その理由は、京に行って東洞の門人となるために医学校を辞したためである。詳しくは後述するが、椿寿が東洞から学んだのは、宝暦13年から翌明和元年(1764)4月、同2年3月、同6年の3回である。つまり椿寿の生活拠点は熊本にあり、京に出向いては東洞に学んで門下を代表する医師となった。

安永2年(1773)に東洞が死去すると、その後椿寿が京に出向いた形跡はみられない。熊本藩の記録によると²⁾、寛政8年(1796)に藩から100石で召し抱えられて、ここで始めて城下の町医から武士身分の藩医となる。しかし医学校の師役として復職したのではない。享和3年(1803)8月から再春館師役と医業吟味役を兼職した時期もあったが、4ヶ月後の12月には老衰を理由にどちらも辞しており、医学校に関わったのはほんのわずかな期間であった。椿寿は藩医となってからも、医学校における教育にはほとんど携わっていないのである。

寛政8年に椿寿が藩医となった理由としては、「家業學術拔群」「門生も多、療治数十年無怠慢致出精」と、椿寿の医学教育と医療活動が藩から評価されていたことであった。ただしここに記されている門生とは、当然のことながら医学校の学生ではない。椿寿が自身の主催する家塾で教育をした塾生のことである。

椿寿の家塾については、かつて『肥後医育史』を編纂した山崎正董によって『肥後医育史補遺』で紹介されたことがある³⁾。ここでは当時村井家



原診館塾生名籍 (熊杏会所蔵)

が所蔵していた「原診館塾生名籍」⁴⁾をもとに、椿寿の家塾には宝暦11年より文化9年(1812)まで総計327名の入門者があったこと、そして塾生が九州を中心に全国に及んだことが明らかになった。

しかし山崎は「原診館塾生名籍」の翻刻文を掲載していないため、氏名・入塾の年月・身分など塾生に関する情報は不明なままである。したがって今日まで、椿寿が主催した家塾や塾生については、ほとんど検討されずにいる。

そこで記述においては、まずは東洞門下としての椿寿の学問の成果を整理して、椿寿の家塾へ入門する者が増えた経緯について明らかにする。次に、山崎正董が村井家で筆写していた「原診館塾生名籍」をもとに、椿寿の塾生について具体的に挙げる。そのうえで椿寿の家塾の意義について検証することにした。

なお「原診館塾生名籍」の原本は、すでに昭和20年の戦災で焼失している。現在においては、山

崎正董の書写したものが椿寿の塾生について知ることのできる唯一の史料であるので⁵⁾、これを翻刻して最後に提示する。検討においては入塾の年度を明示して、翻刻文で確認できるようにした。

2. 村井家の家塾

①村井見朴の家塾

これより椿寿の家塾と塾生についての検討に入るが、村井家の家塾には、父見朴以来の歴史がある。これが椿寿の人生と深く関わるので、まずは見朴の「復陽洞」から説明することにした。

復陽洞の創設は元文期(1736-41)とされ、71名の塾生がいた⁶⁾。このうち田中柳宅・山室意三・土屋玄逸・高本元碩・片山文庵・小川玄以・奥村見節というのは熊本藩の藩医である。復陽洞には官民を問わず多くの医師が集まり、見朴が作成した医案式(医案に記すべき事項)や附方式(附薬の方)をもとに、復陽洞に植栽された薬草や見朴が所有していた薬品を用いて医学修業をし

ていた。

復陽洞という家塾で医学教育が行われていたのには、徳川吉宗の享保改革が大きく影響している。享保期は物価問題や疫病の流行など、社会不安が高まった時期である。したがって江戸では、幕府が小石川薬園に小石川療養所を設立して民衆対策をしたが、全国的には輸入薬種に頼るだけでなく薬種の国産化を推進した⁷⁾。あわせて医学においては洋書輸入の禁止を緩和したことで、医師たちは新たな知識・技術を求めるようになった。そこで熊本という地方社会においても、町人身分とはいえ医師として一目置かれている見朴のもとに多くの医師が集まった。これが復陽洞の始まりである。

しかし見朴の復陽洞は、藩が再春館という医学

校を設立したことで、見朴は医学校の教授となり、復陽洞で学んでいた門人らも医学校に移ったため、復陽洞はその活動を閉じることとなった。

次に見朴の長子椿寿と医学校との関係について説明する。医学校における椿寿は、創設時にすでに盲目となっていた父見朴を支えてその基礎を築き、館内においては総官という指導的立場にあった。見朴が同10年11月に死去すると、同12年2月に再春館講釈（師役）となったのであるが、表1に見るように前年から塾生を受け入れており、見朴の開いた復陽洞を再興しようとする動きがみられる。そして再春館講釈となった年の12月、わずか10ヶ月でその職を辞して京に行き、吉益東洞に師事する。椿寿31歳の時である。

表1 村井椿寿の塾生

「原診館塾生名籍」より作成

年代	藩内		藩外		計(名)	年代	藩内		藩外		計(名)
	藩医	民間医	藩医	民間医			藩医	民間医	藩医	民間医	
⁽¹⁷⁶¹⁾ 宝暦11		1		1	2	寛政7		3	2	9	14
⁽¹⁷⁷¹⁾ 明和8		1		1	2	8			1	3	4
⁽¹⁷⁷²⁾ 安永元		2			2	9		2	1	7	10
3				2	2	10		3	1	1	5
4		1	2		3	11		3	5	4	12
5				2	2	12	1	2	2	10	15
6				2	2	⁽¹⁸⁰¹⁾ 享和元		4	1	10	15
7				3	3	2		10	4	10	24
8		1		8	9	3		4	3	6	13
9				8	8	⁽¹⁸⁰⁴⁾ 文化元		1	8	9	18
⁽¹⁷⁸¹⁾ 天明元				8	8	2	1	1	1	9	12
2		1		6	7	3		2	1	7	10
3				4	4	4		5	3	6	14
4				2	2	5		2	2	8	12
7				2	2	6		5	4	11	20
8				1	1	7		1	3	10	14
⁽¹⁷⁹²⁾ 寛政4				1	1	8		1		14	15
寛政5		4	2	2	8	9				4	4
6	2	14		9	25	計	4	74	46	200	324
総計		327名		うち出身地不明3名(安永5・寛政9・文化7年入門)							

②椿寿の家塾

では医学校辞職後の椿寿は東洞に学びながら、郷里熊本でどのような活動をしていたのであろうか。「原診館塾生名籍」に記載されている椿寿の塾生を年次別にまとめたものが表1である。表の作成においては塾生が藩内・藩外出身者であるか、また藩医・民間医に区別して、塾生の身分がわかるようにした。

表1に見るように、宝暦11年の次に塾生の氏名が記載されているのは10年後の明和8年(1771)である。この間、椿寿の家塾に入門した者はいない。しかし明和8年からは塾生が少しずつ集まり、安永8年(1779)には一気に9名に増える。安永8年から天明元年(1781)までの3か年には、年間8,9名が入門している。その後は寛政4年(1792)まで一旦減少するものの、同5年からは再び塾生が増えて、同11年以降は文化9年(1812)まで、すなわち晩年を迎えて教育活動から身を引くまで、藩内外を問わず、毎年多くの塾生が入門している。加えて新たな展開として、寛政5年以降は藩医の入門が増えている。

このように医学校辞職後の椿寿は、自身の家塾で医学教育をしていた。なかでも医学校を辞した宝暦12年から明和8年というのは、椿寿にとって人生の転機であった。この間に椿寿は京に行き、東洞のもとで医学の研鑽を積んだ。言いかえれば、東洞について医学修業に専念する期間があったことで、椿寿は藩内外から評価される医師へと成長して、多くの塾生が集まる家塾を興すことができたのである。

3. 椿寿の医書

吉益東洞の門人となったことで、医学校辞職後の椿寿の人生は大きく変わっていた。表1でみたように椿寿は多くの塾生に、東洞流の医術を教授した。では九州熊本の地にいながら椿寿は、全国からどのように塾生を集めることができたのだろうか。これには医書の出版が大きく作用している。

椿寿の出版物としては、『薬量考』・『方極刪定』・『薬徴統編』・『医道二千年眼目編』がある。『薬量考』は明和5年(1768)、『方極刪定』は安

永4年(1775)、『薬徴統編』は天明7年(1787)の刊行である。文化9年(1812)に刊行された『医道二千年眼目編』は晩年になってからの集大成であるので、『薬量考』・『方極刪定』・『薬徴統編』の3つが、椿寿が京で東洞から教えを受けていた時期に出版、または準備されたものである。これらの医書の出版が椿寿の家塾の発展と結びついていると考えられるので、これより医書の出版と椿寿の修学状況とをからめてみることにしたい。

①吉益塾での医学修業

椿寿の父見朴は、若い時期から藩に長崎への遊学を希望し、またその当時古医方を代表する医師であった香川修庵に書簡を出すなど、先進医学を志向した医師であった。椿寿もまた、医学校在職中から京の山脇東洋に書簡を出し、一方では吉益東洞の著書『医断』の内容にも衝撃を受けるなど、その関心は中央の医界に向いていた。

椿寿が東洋や東洞のいる京へと向かうきっかけとなったのは、宝暦12年(1762)の出会いである。山脇東洋門下の永富独嘯庵が東洋の指示で福岡藩の門人亀井南冥とともに椿寿を訪ねた際のこと、長崎遊学から戻る途中の讃岐藩の医師合田求吾も熊本にいて、4名が集合したことによる。独嘯庵と南冥が求吾から長崎行きを勧められると、これに椿寿も同行したのである。そればかりか長崎から京へと戻る独嘯庵に引き続き同行して東洋との面談を希望したのであるが、この時は東洋の死去で実現しないまま熊本に戻った。

しかし再度上京する気持ちが固まっていた椿寿は、宝暦12年12月に医学校を辞して、翌13年に京へと向かう。京では、熊本で知古を得ていた求吾との縁で東洞と会うことができ、翌明和元年5月1日まで滞在した。これが、椿寿が東洞から教えを受けた第一回目である⁸⁾。

熊本に戻る際に、椿寿は上梓されたばかりの東洞の著書『方極』と『類聚方』を持ち帰る。後に椿寿は『医道二千年眼目編』巻之十二において、「東洞先師ノ書、凡三部、方極トス、類聚方トス、薬徴トス、皆仲景ノ方法ヲ拡充スルノ書ナリ」と記すように、ここで東洞の医書『方極』『類聚方』

『薬徴』をもとに、『傷寒論』を指針とする椿寿の研鑽と探求が始まった。

折しも宝暦12年には、東洞と引き合わせてくれた求吾が、長崎で吉雄耕牛に学んだ成果として『紅毛医言』を、翌13年には東洋の指示で熊本にやってきた独嘯庵が、長崎での見聞をまとめて『漫遊雑記』を上梓していた。熊本で出会った求吾や独嘯庵という若き医師が次々と著書を発表していく様は、椿寿にとっても医師として新たな路を踏み出す励みとなったといえる。

②『薬量考』の出版

二度目に椿寿が京の東洞のもとへと向かったのは、明和2年3月のことである。この時の様子について『医道二千年眼目編』巻之十には、次のようにある。

明和二年乙酉三月、余始メテ東洞ノ塾ニ遊ブ、茲年類聚方上木開版スル事凡ソ一萬部ナリ、書肆ノ人コレヲ余ニ語ル、五千部ヲ京師・浪華ノ肆ニ出シ売ル、五千部ヲ関東江戸ノ肆ニ出シ売ル、内京師・浪華ノ書店ニ一本モ留メタルモノナシ

ここには、前年滞京した際に出版されたばかりの『方極』と『類聚方』を熊本に持ち帰った椿寿であったが、明和2年3月にはこれを抱えて再び東洞のもとを訪れ、今度は吉益塾で学んだとある。そして吉益塾に出入りする書肆との会話で、昨年東洞が出版した『類聚方』一万部のうち、五千部を京・浪華の書店で売り出し、残りの五千部を江戸で売り出したところ、京や浪華の書店では完売したことを知った。椿寿はこの時の感想を、先史料の続きに次のように記している。

今年寛政丙辰ニ至ツテ三十有二年、幾千部ヲ出シ売ル事ヲ知ラズ、天下ノ医人、一人モコレヲ薬籠中ニ収メザルモノアラナヤ、大ヒナルカナ

ここには、明和元年（1764）初版から32年経っ

た寛政8年（1796）となっても、全国の医師たちは皆が薬籠に『類聚方』を入れて、診療にあたっているとある。明和2年の上京で椿寿は、医師が必要とする実用的な医書の反響を目の当たりにしたのである。

東洞の『方極』は、漢方医学の聖典とされる『傷寒論』『金匱要略』にある薬物の主要処方について簡便に精粹を述べたもので、臨床に役立つ書とされている。そして『類聚方』は、『傷寒論』『金匱要略』の条文を分解し、薬物を処方単位に類別して再編成したもので、113処方を収録する。処方名と薬物構成および方後の調整・服用指示文を掲げて関連条文が列記されているので、医師にとっては臨床に用いるうえで必要な書物であった。

二度目の京行きで椿寿は東洞から、「類聚方ヲ読ムベシ、コレ傷寒論ヲ読ムノ法ナリ」（『医道二千年眼目編』巻之十）との教えを受け、吉益塾で『方極』と『類聚方』のもととなった『傷寒論』『金匱要略』について徹底的に学んだ。この成果として3年後の明和5年には『薬量考』を完成させることができ、京の文泉堂及び浪速・江戸の書店から発売する。これが椿寿が最初に出版した医書である。

『薬量考』の内容は、薬物の度量衡解説書である。古方すなわち『傷寒論』『金匱要略』にある薬物の漢代の薬用量を、江戸時代の換算で示したものである。刊行にあたっては熊本藩の儒学者古屋隔（号；昔陽）の序と椿寿の附言を付した。明和7年と寛政8年には再版されているので、医師や薬種業者から必要とされた医書ということになる。

ところで椿寿が東洞のもとで学んでいた明和期の熊本の医界は、椿寿の置かれた立場として厳しいものがあつた。明和3年から同6年にかけて熊本から立て続けに、伊佐元登・近藤三折・村井藤伍（芳年、椿寿の弟）・田中堅琳・宗梅琳・福岡英安の6名が吉益塾に入門した。このうち椿寿の弟の藤伍を別にしても、東洞流の医術を熊本に持ち込んだのは椿寿一人ではなかったのである⁹⁾。

なかでも明和6年に塾生となった福岡英安は、藩医元斎の子である。熊本藩では宝暦6年12月

に椿寿の父見朴を初代教授として藩が医学校を創設するのであるが、元齋は医学校の創設に先立つ同年7月に、朝鮮人参植方並製法一切を命ぜられ、再春館とは別の場所、坪井建部に500坪の土地を受けて、薬草・薬木の栽培を始めていた。これが藩の薬園「蕃滋園」である。医学校創設後は、蕃滋園は医学校の附属となった¹⁰⁾。この元齋の子英安が東洞流の医術を、医学校に持ち帰ったのである。

椿寿が辞した後の医学校にも東洞流の医術を学んだ医師が誕生しており、医学校でも東洞流の医術を学ぶことのできる体制となっていた。熊本に生活の拠点を置く椿寿にとっては、医家として世間から認知されるためには、『薬量考』に続くさらなる医書の出版が必要となった。

③『方極刪定』の出版

椿寿が3回目に京の東洞のもとで学んだのは、折しも福岡英安が吉益塾に入門したのと同じ明和6年のことである。椿寿が京に着くと、東洞の著書『医事或問』が出版直前で、椿寿は吉益塾の塾長の命でこの校定にかかった。その一方で椿寿は、明和元年に熊本に持ち帰っていた『類聚方』を校策して、東洞に献呈したということが『医道二千年眼目編』序文に記されている。

『医事或問』とは東洞が著した医論集である。37項目にわたって自身の医学観を述べたもので、これは明和5年に東洞の長子南涯の跋、翌6年に自序をつけて刊行された。椿寿はこの校定に関わったことで、東洞の医論を享受しながら自身の医道における方向性を定めることとなった。

一方、椿寿が校策した『類聚方』について東洞は、「先師曰可ナリ、若コレヲ再刻スルコトアラハ、子カ言モ取ルヘシ、杓勤シテ又ソノ命ヲ奉ス」(『医道二千年眼目編』序文)と言っていたという。東洞は椿寿が献呈した『類聚方』を評価したのである。師がその才能を高く評価するまでに、椿寿は東洞のもとで成果をあげることができた。東洞は椿寿が京を去る時、自ら淀口まで送って「吾道ノ寄、関ヨリ以西、一ニ以テ君ニ委ス」¹¹⁾と伝えたという。このことから東洞は椿寿に、西国の地

九州における東洞流の伝播を委ねたことが判明する。

安永2年に東洞は死去するのであるが、椿寿は東洞のもとで学んだ成果として、二冊目の医書を発表する。これが明和9年序文、安永4年附言の『方極刪定』である。東洞の『方極』は『傷寒論』『金匱要略』の主要処方について簡便に精粹を述べたもので、臨床に役立つ書とされているが、椿寿の『方極刪定』は『方極』の内容を、さらにわかり易くまとめた解説書である。これは明和5年に『薬量考』を出版した時よりも多い、江戸・尾張・伊勢・京・大坂の八つの書店から発売された。

④『薬徴続編』の出版

東洞の死去後も、椿寿の旺盛な出版活動は続く。安永4年に『方極刪定』を出版すると、次は東洞の『薬徴』の校定に取りかかり、天明7年(1787)に『薬徴続編』として出版する。

東洞の『薬徴』とは、明和8年(1771)に東洞が序文を書いていたものを、門人らが校定をして天明5年(1785)に上梓した、東洞の代表作とされる薬物書である。

内容は、『傷寒論』『金匱要略』で用いられる主要薬物について、両書の条文からその薬能を帰納し考定したものである。一種の本草書ではあるが、従来の伝統本草の枠を全く脱却した革新的な薬物書として当時の医界に迎えられ、現代の漢方にまで強く影響を及ぼしている。

この『薬徴』の続編として、『薬徴』刊行から2年後の天明7年に椿寿が附言をつけて出版したのが『薬徴続編』である。『薬徴続編』附録の最後に安永7年(1778)の日付が書き込まれているので、東洞の門人らが『薬徴』を出版する以前から準備していたものということになる。

『薬徴続編』には『薬徴』未収の古方用薬を収載し、上巻には4種、下巻には6種、附録には78種の薬物を記載して、江戸・尾張・京・大坂の12の書店から発売した。寛政8年には吉益東洞の子南涯の序を加えて再版したが、その後も文化9年(1812)・文政8年(1825)・同11年(1828)年と繰り返し再版された、椿寿の代表作である。

椿寿が『葉徴続編』を出版するまでの経過については、『葉徴続編』附言十七則と『医道二千年眼目編』巻之十二に記されているので、これらの記述内容をもとに以下にまとめる。

東洞の『葉徴』は7回改稿され、天明5年に門人らによって出版された。ところが椿寿は、以前から宝暦期に書かれた原稿を得ており、熊本に所持していた。これには2種類あり、一つは弟喬年が江戸で謄写したもの、一つは弟芳年が京で謄写したものであった。

明和2年3月に京に出向いた際に東洞にその鑑定を受けたところ、これは草稿であって正本は紀州にあり、門人のために公にはしなかったという回答を得た。それで椿寿も、自身が所有する草稿本を表に出すことはしなかったという。

その後安永2年になって修夫（東洞子、南涯）の定本を得たとは、これが東洞が出版した『葉徴』の原本ということになるが、椿寿はこの時は、自身が所有する草稿本との違いが判別できなかったという。ただ椿寿は東洞とともに自身が所持する草稿本の校定をしていたので、これをもとに安永7年に『葉徴』の続編及び附録として『葉徴続編』をまとめた、序文に記している。つまり椿寿は東洞との共同研究の集大成として、『葉徴続編』をまとめたといっているのである。

『医道二千年眼目編』巻之十二において椿寿は、『葉徴続編』をまとめた背景として次のことを記している。「嗚呼先師ノ長ゼザル所ハ文章ノオナリ」と、この言葉が意味するところは、東洞の代わりにわかり易くまとめたということであろうか。この文言から東洞死去後の椿寿には、東洞流を背負う医師としての自負があったことが感じられる。

4. 家塾の発展

前項では椿寿が初めて東洞に師事した宝暦13年（1763）から、東洞が死去する安永2年（1773）までを中心に、東洞の医書の出版に椿寿がどのように関わって、自身の医書をまとめていったのかを整理した。

明らかになったことは、椿寿は東洞の医書の出

版に参加することで医師としての見識を高め、東洞の片腕となるほどに成長していたことである。つまり椿寿と東洞は共同研究者といえる関係にあり、東洞の学問を継承することで椿寿は自身の家塾を興すことができたといえる。以下では、医書の出版がもたらした椿寿の家塾の発展について検証する。

①復陽洞から原診館へ

椿寿の人生において東洞のもとで学んだ明和期というのは、医師として成長するための研鑽の時期であった。改めて明和期以降の椿寿の動向について整理すると、明和期は吉益塾における医学研究と東洞の医書の出版準備に追われ、個人としては同5年に『葉量考』という医書を出版した椿寿であったが、明和6年が最後の京行きとなる。安永2年に東洞が死去すると、その後は京に行く目的がなくなったのか、安永期には毎年新たな塾生を迎えると、その生活は変化する。

東洞が死去して2年後の安永4年に、椿寿は『方極刪定』を出版するが、その3年後の同7年に、村井家では見朴以来の家塾を建て直して、椿寿は本格的に塾生を受け入れるための準備にかかる。この時の状況については、同年12月の「鎮西復古医林復陽洞再興上祭文」¹²⁾で知ることができる。

祭文の最初に「一新柱石、爰建復古之医林、再興棟梁、以置原診之家塾、医々典刑、尚伝三世家訓之存、生々術業」と、柱石を一新して棟梁を再興するとある。この記述から、椿寿が家塾を建て替えていることが判明する。そしてこのなかに三世の家訓とあるが、これは椿寿の祖父にあたる林田知安（後に村井に改姓）が熊本城下に医家を構えて以来、「知安－見朴－椿寿」と三世に渡って受け継がれた家訓が村井家にあったという意味である。この家訓を掲げて椿寿は、父から継いだ家塾を立て直し、医家としての発展を願って再出発したのである。

そして祭文の続きには「仍貫之法於有旧、雖未能得英才、而教育之、庶幾使子弟以講習焉、夫我伎之塾也」という文言がある。これは、古くから受け継がれてきた医術の法を多くの子弟に教育

し、講習する。これがわが塾のめざすところであると、塾の特色を述べたものである。古くから受け継がれてきた医術の法とは、東洞のもとで学んだ傷寒論に記された内容のことで、椿寿は九州熊本で東洞流の医術を学ぶことのできる場所として自身の家塾を特徴づけた。そして藩外からも塾生を集めるために、安永9年には他藩からの塾生を対象とした「入塾規定」を定めた¹³⁾。

こうして見朴以来の家塾を建て替えて、医学教育に対する理念も掲げると、『葉量考』・『方極刪定』の出版で、全国的にも椿寿の医師としての知名度が増していたこともあり、安永8年には新しい家塾に、一気に9名の塾生が入門した。

一方椿寿は家塾での教育だけでなく、医師として診療にも励んで知名度を上げていた。天明4年(1784)5月には長崎奉行土屋守直、翌5年9月には同じく戸田氏孟の病氣治療を依頼されている。すると藩内で九州一の名医との評判を得ることとなり、城下の薬店では椿寿の薬を求める人々が増え、豪商は治療を受けるために城下から離れた自宅までも椿寿を招いた¹⁴⁾。

その後も天明7年に『葉徴統編』を出版したことで、椿寿は技量において熊本藩を代表する医師としての位置を確立する。寛政元年(1788)には熊本細川家の支藩宇土家の長松院の病氣治療、同3年には江戸から戻った藩主細川齊茲に熊本滞在中、薬の投与を求められるなど、藩主一族から診察・治療を依頼されている。同7年11月には柳川藩主の病氣治療をするために、柳川まで丁重に招かれた¹⁵⁾。

するとそれまで身分的には城下の町医であった椿寿が、寛政8年にはついに「家業學術拔群、門弟多、療治数十年出精」という理由で、御擬作高100石で藩に召し抱えられる。ここで村井家は、正式に武士身分の藩医となったのである。

こうした椿寿の成功は、家塾経営にも反映されている。寛政10年には家塾の名称を、父見朴の代から用いていた復陽洞を「原診館」と改称し、塾則を見直して「原診館七則」を定める¹⁶⁾。原診とは安永7年の祭文にあった「以置原診之家塾」からきたもので、これまで用いてきた「洞」から

「館」に改めたのは、椿寿の家塾が広く知られて教育施設としての規模が拡充したためと考えられる。

この時の椿寿の年齢は66歳。しかしその活動は衰えることなく、むしろ活発となる。文化8年(1808)まで毎年10名以上の塾生を迎え、享和元年(1801)には最多の24名が「原診館塾生名籍」に記されている。享和3年には再春館師役及び医業吟味方に任命されたが、すぐに老衰を理由に辞職している。これは椿寿の考えとして、家塾での教育に専念するためであったことは明らかである。

文化12年に83歳で死去するまでの間、初めて塾生を迎えた宝暦11年からの総数は327名にのぼり、「原診館塾生名籍」に記されていない遊学生が他にも多くいたことから¹⁷⁾、東洞流の医術は九州熊本から各地へ広がることとなった。生前東洞は椿寿に対して、東洞流の医術を西南地域に伝えることを望んでいたが、この願いは椿寿の家塾によって実現されたのである。

では椿寿の家塾に入門して東洞流の医術を学んだのは、具体的にはどういう人々であったのだろうか。表1では年次別に塾生の出身地を藩内と藩外に分け、かつその身分を藩医と民間医とに区別して、家塾が発展していく経過をみた。藩医は、藩の医療政策において中心的な立場にある医師であり、民間医は地域医療の先頭に立つ医師であるので、入塾の目的はその立場で異なるが、東洞流の医術を椿寿から習得しようとした点では同じである。これよりは塾生の出身地をもとに入門の目的と、家塾のはたした役割について検討する。

②藩内からの塾生

熊本藩から入門した藩医は、田尻新益(寛政6年、再春館引経師員)・江村宗石(寛政6年、熊本医員江村柳溪弟)・松村玄壽(寛政10年、後改元珠、八代医員)・竹崎文庵(寛政12年、宇土侯医員竹崎玄胥)・竹崎宗参(文化2年、八代医員竹崎淳節養子)、以上の5名である。

八代医員とは熊本藩の家老松井家のお抱え、宇土医員とは細川家の支藩宇土家のお抱えの、武士

身分の医師である。熊本細川家からの藩医の入門は、田尻と江村の二人に過ぎない。先に述べたように明和6年に福岡英安が吉益塾に入門していたことで、東洞流の医術を医学校に取り入れることができたためと考えられるが、この点については改めて検討が必要であろう。

次に民間からの塾生についてみるために、熊本藩では城下以外の地域社会は、飽田・託麻・上下益城・宇土・葦北・玉名・山本・菊池・合志・山鹿・阿蘇・八代の13郡と、豊後国の飛び地で構成されるので、この編成にしたがって整理をしたのが表2である。

この表から明らかになることは、山本・合志両郡からの塾生はいないが、ほぼ領内全域から塾生がいることである。このうち飽田・託麻・上下益城という城下に近い郡からの塾生が多いのは、地元で医業に携わりながら椿寿のもとで学ぶことができたためと考えられる。

このなかには、飽田郡高橋町の五十君壽亭（明和8年入門）と五十君壽伯（文化6年入門、故弟子五十君壽亭養子）、同高橋村の内野元暢（安永4年入門）と内野由儀（寛政6年入門、元暢弟）、託麻郡戸嶋村の魚返敬意（寛政6年入門）と魚返啓太（寛政11年入門、後改溪中、魚返敬意子）のように、親子・兄弟で入門する医師が多数みられる。

また塾生のなかには、次のような者もいる。寛政6年に入塾した山鹿郡の緒方俊民は、享和元年に熊本藩医南李斎の養子となった。南家の医師としての初代猿渡三哲（後改姓、南）は京で野間三竹に3年間、江戸で幕府奥医師今大路道三のもとで17年間修業した後に熊本で医業を始め、享保2年から藩医（200石）として召し抱えられた医家である。緒方俊民は享和元年に南家の養子となってからは、南家代々の李斎を踏襲して、藩主の御匙もつとめた¹⁸⁾。

葦北郡の医師深水家からは、玄門（寛政5年入門）と弟の宗古（享和3年入門）が入門する。玄門は親宗安まで三代続く医家の長子で、寛政5年に椿寿のもとへ入門すると、同9年まで稽古を続け、椿寿の代脉もした。医書を心掛けて葦北郡中抜群と評価され、椿寿から学んだ薬種に関する知

表2 熊本藩の民間医

城下町	3
飽田郡	10
託麻郡	8
上益城郡	10
下益城郡	18
玉名郡	6
山鹿郡	1
菊池郡	1
宇土郡	2
八代郡	6
葦北郡	5
阿蘇郡	2
山本郡	0
合志郡	0
豊後	3
計（名）	79

識をもとに地域医療に励んでいたところ、葦北郡での功績が認められて藩の医療対策に携わるようになり、ここでの実力が認められて藩に召し抱えられると藩主の御匙にもなった¹⁹⁾。

宗古の方は、椿寿の塾生として兄の代脉を受け持った。原診館における成績は抜群で、傷寒論についてはその一句片言まですべて窮理していたという。綿密に規律を守って施治をしたという理由で、兄同様藩から褒賞された²⁰⁾。

以上のように東洞流を学んだ椿寿の医術が社会的に認められると藩内からの入門者が増え、藩内にいながら東洞流の医術を学べる家塾として原診館が発展したことが明らかとなる。修了者の実力は藩からも認められるほどで、優秀な門人と養子縁組をして家業を存続させる藩医がいただけでなく、新たに藩医として家を興す塾生も出現した。

以上のような民間出身の医師が活躍する事例は、椿寿の塾生に限ったことではない。医師はその技量を評価されたならば、活動の場を広げることができたのだが、椿寿の家塾の意義は、熊本藩には藩が設立した医学校があるにも関わらず、多

数の医師が入門していることである。

③藩外からの塾生(藩医)

次に藩外からの塾生についてみるために、地域ごとに藩医と民間医に別けて整理をしたものが表3である。

総勢242名のうち、九州以外からの塾生が42名いる。このなかには東北地方の仙台・出羽・津軽から入門した者もいる。ほかにも関東・東海・北陸・近畿・四国からの塾生もいて、中国地方からは九州に近い長州を中心に多くの者が入門している。これら遠方からの塾生は紹介という手段だけでなく、椿寿の医書を見てその指導を求めて、わざわざやってきた者もいたはずである。

九州出身の塾生についてみると、椿寿の家塾に

は天草・人吉藩という同じ肥後国内に限らず、ほぼ九州全域から塾生が集まっている。なかでも特に多いのが筑後久留米藩であり、豊後臼杵藩、肥前島原藩という近藩からの入門である。どのような者が入門したのであろうか。

まず藩医身分の塾生については、豊後竹田藩・同臼杵藩・肥後人吉藩から各6名が、日向延岡藩から4名、肥前佐賀藩・同島原藩から各3名と、九州各地から多数の藩医が入門している。このなかから島原藩医本多家と佐賀藩医松隈家の2つの事例を、次に取り上げる。

⑦島原藩医本多家

他藩からの藩医の特徴的な例として、島原藩の本多家がある。島原藩における藩医としての始祖

表3 藩外からの塾生

(幕)は幕領

地域名	国名	藩	藩医	民間医	計(名)	地域名	国名	藩	藩医	民間医	計(名)
九州	肥後	天草(幕)		15	15	九州	豊前	小倉	1	4	5
		人吉	6	2	8			23	中津		3
	豊後	竹田	6	9	15	筑前	博多		5	5	11
		臼杵	6	15	21		秋月	2	4	6	
	佐伯	1		1	薩摩・大隅	1	5	6	6		
	府内	2	1	3	日向 延岡	4	4	8	11		
	日出		1	1	飢肥		1	1			
	森	1		1	幕領		2	2			
	日田等(幕)			11	11	中国	長州	1	9	10	20
	その他		3	3	56		徳山	1	1	2	
	肥前	長崎		5	5		広島		3	3	
		諫早	1		1		福山	1	1	2	
	五島	1	1	2	鳥取			1	1		
	平戸	1		1	津和野			1	1		
	対馬		2	2	その他			1	1		
	佐賀	3	6	9	四国		伊予・阿波	1	2	3	
	唐津	2	6	8		近畿	近江・丹波等	1	10	11	11
	島原	3	16	19	北陸	越前・越後等		3	3	3	
	鹿島	1		1	48	関東東海	遠州・江戸		2	2	2
九州	筑後	久留米		32	32	東北	陸奥・出羽等	1	2	3	3
		柳川	1	4	5	37	合計		49	193	

元良（後、白水）は、京都西洞院二條上の町人であったが、安永7年（1778）に椿寿の家塾に入門したことで、一家は九州に定着することとなる。天明元年（1781）に島原藩の藩医として召し抱えられたからである。

島原藩からは、本多元良が入門する前年の安永6年4月に高田椿治という民間医が入門していたが、翌月には破門となっていた。そのためか安永8年に、一気に3名の民間医が椿寿のもとに入門する。この間、安永7年に入門していた本多元良が、天明元年に藩医として召し抱えられるのであるが、翌天明2年にも民間から3名の医師が入門している。以上のことから島原藩では、東洞流の医術を積極的に藩の医療に取り入れようとしていることが判明する。

少し期間が空くがその後も、寛政6年から同11年の間に5名（民間医4名、藩医1名）、享和2年に2名（民間医1名、藩医1名）、文化6年に3名（民間医2名、藩医1名）、同7年に2名の民間医と、引き続き複数の者が椿寿のもとに入門している。

このうち寛政8年・享和2年・文化6年に入門した藩医とは、すべて本多家からの入門である。寛政8年入門の惇太郎（後、成惇）と文化6年入門の元良は、白水と改名した初代元良の子であり、享和2年入門の元敬もその名から元良の子と思われる。すなわち本多元良家は東洞流の医家として認められて島原の地に定着し、発展した医家ということになる。

④佐賀藩医松隈家

佐賀藩の松隈家からは甫庵が文化2年（1805）7月に入門する。松隈家の先祖は、近世前期に日本医学中興の祖といわれる曲直瀬家に学んだ医家である²¹⁾。藩から知行250石（内切米50石）で召し抱えられており、また小城支藩においても別家松隈家は藩を代表する主要な医家であった。

こうした医師として由緒のある松隈家から、文化2年に甫庵が椿寿のもとに入門した理由として考えられることは、佐賀藩からはそれまでも椿寿のもとには、寛政11年に横尾静安が、文化元年

には西岡周禎が入門していたが、松隈家でも東洞流の医術を取り入れる必要があり、甫庵が入門したという経緯がみえてくる。

甫庵の子元南も父と同じく内科医であり、眼科医であった。父が学んだ東洞流の医術を活用して診療にあたっていたのであろうが、その後元南は西洋医術を研修して先進医療を取り入れ、明治維新时期には佐賀藩の医学校好生館の病院長となっている。

つまり松隈家は、近世前期には曲直瀬家の医術を学んで医家としての基盤を固め、近世後期になると当時一世を風靡した東洞流の医術を椿寿から学び、これに幕末期には西洋医術をいち早く取り入れて、時代とともに進化した医家である。

ところで、甫庵が村井家塾で学んだ後のことである。佐賀の薬種商野中家が所蔵する椿寿著『痘瘡問答』（天明8年5月晦日識）写本には、「天保九年十一月上旬於佐嘉ニ松隈亭安謹写之」の奥書がある²²⁾。これは小城支藩の松隈亭安が、甫庵が村井家塾で書写して持ち帰っていたものを天保9年（1838）に書き写したものであることになり、椿寿の医術は佐賀でも継承された。

④藩外からの塾生（民間医）

民間からの塾生としては、豊後竹田の加藤玄徳（安永8年入門）、豊前上毛郡岸井村の中邨元明（寛政6年入門）、豊前中津の曾木仁呂久（寛政11年入門）を取り上げる。

⑦豊後竹田藩の加藤玄徳

加藤玄徳は豊後竹田藩の領地、直入郡阿鹿野村に生まれた。幼名新吉、成長して玄徳に改名。安永3年（1774）に熊本に遊学し、同8年から椿寿のもとで医学修業をした²³⁾。修学後は地元に戻り医業に携わった。この玄徳が医家加藤家の初代で、身分的には在医である。

初代玄徳は享和3年（1803）1月に、医業心がけよく治療出精という理由で「別帳」に記載されたという。これは藩が作成した医師名簿に登録されたという意味であろう。すると同年8月には藩から疫病治療方に任命されたというので、この時

期の竹田藩では、藩の政策のなかで民間医を地域医療の担い手として位置づけていることが判明する。その後初代玄徳は、文化3年(1806)に御目見えの地位を得る。

二代玄徳も文化10年に御目見えとなり、三代玄徳は華岡流の技術をくむ熊本藩医鳩野家で外科を学んだ。四代玄徳は慶応3年生れであるが、椿寿のもとに入門した初代玄徳より、加藤家は代々豊後竹田で地域医療を担う医家として定着した。東洞流の医術を軸にその時代の先進医療を取り入れて発展した点では、佐賀藩の松隈家と同じである。

④豊前上毛郡中村元明と豊前中津下毛郡曾木仁呂久

寛政6年(1793)に豊前上毛郡岸井村から中邨元明が、椿寿のもとに入塾する。豊前上毛郡岸井村は、寛文7年(1667)に豊前小倉藩主の弟が領地を分与されて成立した支藩新田藩領(1万石)にある。新田藩の行政区画としては本藩と同様、上毛郡内に岸井手永と黒土手永という二つの中間的な行政区画が設けられていた。しかし藩主は参勤交代のない江戸定府の大名であったので、領内を実質運営していたのは、手永を受け持つ大庄屋であった。享和年間の岸井手永大庄屋を中村忠左衛門といったが²⁴⁾、中邨元明はこの中村忠左衛門本人である可能性が高い。

いっぽう曾木仁呂久(通称：遠入仁六)が²⁵⁾、椿寿の家塾に入門するのは寛政11年のことである。「原診館塾生名籍」には、出身地が豊前中津下毛郡青邨人とあり、豊前中津領曾木組大庄屋の子である。名は亮、字は子功、号は墨莊といい、熊本藩時習館の李教授(高本紫溟)に学び、医術を椿寿に学んだ。熊本での修学期間は13年に及ぶ。

しかし修業後の生活の拠点は、隣接する小倉藩の支藩新田藩にあった。岸井手永に属する緒方村で医業を開業し、地域の信頼を得るとその後は農政にも従事して功績をあげた。文化9年には叔父で黒土手永大庄屋であった矢野建吉の後を継いで、黒土手永の大庄屋に転じ、文政4年から同9年8月まで務めると、その後は天保3年3月まで岸井手永の大庄屋であった。

ここで取り上げた豊前小倉藩支藩の二つの手永の大庄屋は、先祖から続く医家ではない。熊本藩にやってきて椿寿の家塾で学んだ後、新規開業した医師である。椿寿の家塾では社会から必要とされる実証的な医学教育をすることで、地域医療を担うことのできる新たな医師を養成したのである。

結 語

18世紀中期以降、徳川吉宗の享保改革による幕府政策の変化により、西洋への関心が高まって蘭学を学ぶ者が出現したことは、医学の世界も同様であった。しかしながら日本近世医学の発展において、この段階の基礎医学は漢方であり、古医方といわれる学派が日本の医界を圧巻していた。なかでも吉益東洞の実証主義は日本の漢方を体系づけたとされる。この東洞流を代表する門人の一人が熊本藩の村井椿寿である。

本稿では、九州を中心に西南地域各地から熊本の椿寿のもとに塾生が集まっていたことを取り上げた。その背景として、18世紀後半から熊本藩を筆頭に各地で藩による医学校の設立が始まっていたとはいえ、まだほとんどの地域では医師の養成は家伝か、私塾に限られていた。したがって実証的な東洞流の医術を学ぶために、医学校設立の経験を持ち、体系的に学ぶことのできる椿寿の家塾に塾生が集まったのは、近世中期の社会状況からして、当然のことといえよう。

椿寿の家塾で学んだ医師によって、東洞流の医術は各地に伝播していくこととなった。これは医療が身近となった社会の到来である。

なお本稿で「原診館塾生名籍」から取り上げた椿寿の塾生は、一部の紹介にすぎない。医師は医学の進展とともに、社会からは医療の質の向上を求められる。椿寿が熊本で出会った合田求吾や永富独嘯庵は、この時期から西洋医学に関心を持っていた。漢方を学んだ医師が時代の要請と立ち向かいながら、いかに西洋医学を取り入れていくのか、これは別の課題である。本稿との関連で述べるならば、「原診館塾生名籍」をもとに各塾生の進路について究明すれば、時代の仲立ちをした椿

寿の家塾の意義がより鮮明になるものと考え。

また本稿では椿寿の著書と家塾を中心にみてきたため、椿寿が決して離れることのなかった熊本
の地、その医学教育の中心にあった藩の医学校との
関係については述べていない。町人身分から藩
医となった椿寿は、当然のことながら藩から必要
とされた医師である。藩医となってからは医学校
での教育に直接的には関わってなくても、その
影響は大きなものであったはずである。引き続き
この点について究明をしたい。

謝 辞

なお本論文は、公益財団法人武田化学振興財団
2017年度杏雨書屋研究奨励による成果の一部で
ある。

注

- 1) 浜田善利. 肥後の医学教育と村井家. 日本医史学雑誌 1991; 37(4) 63-93. 村井見朴以下, 村井家代々の医学教育者としての事蹟が整理されている。
- 2) 熊本藩. 先祖附. 資料番号; 南東57. 村井雲臺の項. 永青文庫所蔵; 熊本大学図書館架蔵. 熊本藩の記録では、ほぼ椿寿で記載されているので、本稿では椿寿で統一する。また本稿における椿寿の藩医としての事蹟は、本史料による。
- 3) 山崎正董. 肥後醫育史. 熊本: 鎮西医海時報社; 1929, 前同. 肥後醫育史補遺. 前同; 1931
- 4) 村井家の家塾は文化6年で閉じたわけではない。椿寿の子孫は、明治維新时期まで熊本藩の藩医であり、後には家塾を「雲来館」と称している(前掲. 肥後醫育史補遺. p.38)。原診館は椿寿の塾名ということになる。
- 5) 山崎正董写. 原診館塾生名籍. 熊本大学医学部同窓会熊杏会所蔵
- 6) 前掲. 肥後醫育史補遺. p.2-11. 各医師の身分については、前掲. 肥後醫育史. p.54-56を参照した。
- 7) 大石学. 享保改革期の薬草政策. 享保改革と地域政策. 東京: 吉川弘文館. 1996年. p.470-506
- 8) 入門のきっかけについては、松崎範子. 村井椿寿(琴山)の『漫遊説』. 日本医史学雑誌 2018; 64(3): 299-310. 明和2年の京行きは『医道二千年眼目編』巻之十, 同6年の京行きは同序文より. 本稿の検討において、東洞の医書『方極』『類聚方』『薬徴』と

- 椿寿の医書『薬徴統編』『医道二千年眼目編』の解説は、大塚敬節・矢数道明編. 近世漢方医学書集成 10~12・31~34. 東京: 大修館書店; 1981を用いた。
- 9) 町泉寿郎. 吉益家門人録 (1). 日本医史学雑誌 2001; 47(1). 163-178
 - 10) 前掲. 肥後醫育史. p.194
 - 11) 前掲. 近世漢方医学書集成 31. p.8
 - 12) 村井椿寿. 写本. 診余漫録三. 2-4丁. 武田科学術財団杏雨書屋所蔵
 - 13) 前掲. 復陽洞家塾入塾規定. 肥後醫育史補遺. p.13.
 - 14) 花岡興輝編輯. 鳥屋日記. 熊本: 菊池市史編輯委員会. 1987. p.409, 441, 462
 - 15) 上妻博之. 写本. 上妻文庫 209. 熊本県立図書館所蔵
 - 16) 前掲. 肥後醫育史補遺. p.26
 - 17) 椿寿が熊本藩の家老島田嘉津次へ提出した上書には、寛政期にはすでに弟子・門人が500人以上、20か国以上に及ぶとある(前掲. 肥後醫育史補遺. p.9-30)。椿寿は名簿に記載のない遊学者も広く受け入れており、「原診館塾生名籍」の記載以上に弟子・門人がいた。
 - 18) 前掲. 先祖附. 南東57. 南李斎の項
 - 19) 町在. 深水玄門の項. 資料番号; 9.19.2-1, 9.20.1, 9.20.4. 前掲. 永青文庫所蔵
 - 20) 前掲. 町在. 深水宗古の項. 資料番号; 9.20.1, 9.20.3
 - 21) 青木歳幸. 近世佐賀藩医学の先進性. 佐賀学 佐賀の歴史・文化・環境. 佐賀大学佐賀学創成プロジェクト編. 福岡: 花乱社; 2011. p.99-117
 - 22) 大島明秀. 村井琴山「痘瘡問答」(校訂版). 史料・九州の種痘「九州地域の種痘伝播と地域医療の近代化に関する基礎的研究」報告書. 佐賀: 青木歳幸. 2018. p.27-42
 - 23) 黒川健士. 岡藩医学梗概并古今医人小史. 大分県竹田市. 1940. p.87-88
 - 24) 豊前市史. 福岡県; 豊前市史編纂委員会編. 豊前市. 1993. p.1450-1451
 - 25) 同上. 豊前市史 文書資料. 1995. p.493-494

参考文献

- 大塚敬節・矢数道明編. 近世漢方医学書集成. 東京: 大修館書店; 1981
- 小曾戸洋. 日本漢方典籍辞典. 東京: 大修館書店; 1999
- 寺澤捷年. 吉益東洞の研究—日本漢方創造の思想—. 東京: 岩波書店; 2012
- 青木歳幸. 江戸時代の医学 名医たちの三〇〇年. 東京: 吉川弘文館; 2012

「原診館塾生名籍」翻刻文

凡 例

- ・本資料は村井家旧蔵文書を、山崎正董が明治期に書写したものである。
- ・本資料を所蔵するのは、熊本大学医学部同窓会「熊杏会」である。
- ・本文は原本通りに翻刻した(ただし原文は縦書き)。

原診館塾生名籍

村井家文書

氏名	原籍	入門年月	備考
荒牧玄齡	高橋町人	宝暦十一年辛巳十一月入門	
家原元哲	豊后竹田人		
五十君壽亭	高橋町人	明和八年丁卯五月	
相川益助	天草郡鬼池村人		
三井英治	阿蘇内牧人	安永元年壬辰四月	
宗 梅元	熊本人		
棕野元章	豊後日田人	安永三年甲午五月	
眞野三圭	肥前長崎人	同月	
内野元暢	高橋村人	同四年乙未六月	
雨森良察	球磨人吉官医	同八月	
伊東玄育	豊後竹田官医	同十月	
阿部淳平	阿波麻植郡瀬詰村人	同五年丙申三月	
帆足玄齡			
蓑田見節	後改元哉, 球磨人吉人	同九月	
奥田掃部	天草郡砥岐郡棚底村人	同六年丁酉二月	破門
高田椿治	肥前島原領三江町人	同四月	五月十八日破門
大津元龍	後改元隆, 筑後久留米領上妻郡山田村人	同七年戊戌五月	
青木道碩	右同	同月	
本多元良	後改白水, 京西洞院二條上街人	安永七年戊戌五月入塾	
		天明元年十一月辞塾, 為島原侯医員	
豊島元珉	肥前島原城人	安永八年己亥一月	
磯野元裕	肥前島原有家隈田村人	同三月	
寺尾禮吉	後改玄施, 内牧人	同八年己亥三月	
加藤玄徳	豊後竹田領阿鹿野人	同八年己亥五月	
細井玄林	同 下志地人	同月	
甲斐壽庵	同 阿鹿野人	同月	
西 道莽	球磨新東方村人	同六月入塾	
		天明三年十一月為球磨侯官医	
中岡三英	肥前島原有家隈田村龍石也	安永八年己亥十月八日	
遠藤玄珪	豊後日田隈町人	同十月廿七日	

上妻可忠	筑後久留米領上妻郡新庄村人	同九年庚子三月廿九日
牛島慶順	同 津之江村人	同月同日
伊東博庵	豊後竹田人	同四月四日
原 文龍	肥前養父郡西尾村	同六月四日
細井東菴	豊後竹田領下志 ^(ママ) 土 地人玄林兄	同七月四日
塚本恕山	筑後御原郡田丸村人	同九月八日
高原道怡	肥前長崎翹屋街人	同 同日
池尻元泰	筑後山本郡草野町人	同 同日
佐々木元昌	筑後久留米領御井郡下西鯨坂村人	同十年辛丑三月朔日
青柳玄悦	豊後杵築領速見郡八坂手永中村人	同三月十四日
中田仙菴	筑後三潞郡榎津町人	安永十年辛丑三月十六日
熊本原仲	同 三妻郡人	同 同日
酒井勇謙	同 三潞郡人	同 同日
西田元朔	筑後田主丸町人	同四月廿五日
岩永一作	筑後久留米領小頭町人	同 同日
原 遊仙	筑後御原郡本郷町人	天明元年辛丑九月十四日
溝部有山	豊後杵築領今市村人	天明二年壬寅三月五日
三箇桂山	筑後御井郡藤山村人	同三月十日
馬場宗庵	肥前島原堂崎村人	同四月十五日
山本三壽	肥前島原領分豊前宇佐郡高盛村人	同九月廿八日
市瀬東元	肥前島原有家隈田村人	同十月廿四日
吉田文桂	因幡近江郡鳥取城人	同十一月廿六日
今永大壽	竹宮村人	同十二月十四日
後藤玄珪	豊後臼杵領小津留邑人，天明三年辞豊後，住于肥後	同三年癸卯七月八日
久我龍藏	肥前長崎人	同 同日
三浦丹次	石州那賀郡津和野人	同八月四日
佐藤九一	豊后大分郡寒田村人	同十月廿八日
中原五三郎	天草郡久玉村人	同四年甲辰四月十四日
那須榮吉	球磨湯前人	同十一月廿六日
近藤伯宜	筑后柳川今福邑人	同七年四月十八日
南村文卿	筑後柳川長島村人	天明七年四月十八日
後藤亮安	豊後戸次人	同八年五月十九日

以上 卷之一

卷之二

荒木元説	小川人	寛政五年癸丑十一月十九日
上瀧三益	筑後久留米領塚本恕山姪	同四年壬子入門
嶋田元貞	肥前諫早医	同五年癸丑十一月十九日
柿野 ^(ママ) 辯壽	下益城小筵人	同前
伴如石	矢部郷藤木村人	同前
中垣玄潜	筑後御井郡稻敷邨人	同前
深水玄門	葦北津奈木邨人	同前
田吹淳	豊後府内医員田吹某養子, 本白杵人	同前
田島八郎次	薩摩出水人士	同前
後藤道景	上益城上早川邨人	寛政六年甲寅正月二十日
渡邊秀齋	上益城下早川邨人	同前
牧玄朴	下益城堅志田村人	同前
柿崎 ^(ママ) 金壽	下益城 辯壽弟	同前
田尻新益	再春館引経師員	同二月朔日
宗像祐倫	後改名道允 古町人	同前
中嶋元淳	玉名郡白濱邨人	同前
内野由儀	高橋人 元暢弟	同前
江村宗石	江村柳溪弟	同二月十七日
緒方俊民	山鹿杉邨緒方某弟	同六年甲寅二月入門, 享和紀元辛酉 南李齋養為子共, 改姓名曰南李庵
桑原大晉	後改名大春, 天草郡宮田村人	同六年甲寅三月
緒方安壽	下益城郡岩下邨人	同前
山本友可	筑後竹野郡田主丸邨人	同前
石田景山	同 生葉郡今竹邨人	同前
中山養元	鶴崎人	同前
木邨 樗	陸奥津軽弘前人士	同四月
赤石鶴齡	長崎今町人	同前
魚返敬意	詫摩郡戸嶋村人	同六月
魚返建民	同 小山邨人	同前
笹折清庵	同 小谷村人	同前
青木貞助	同 小山邨人	同前
渡辺元省	豊前宇佐郡四日市人	同前
中邨元明	同 上毛郡岸井村人	同前
鱸 文叔	越前 敦賀人	同七月
進藤高叔	肥前島原千々石村人	同十一月
池田桃菴	玉名郡小天村人	同七年乙卯正月
田尻叔益	玉名郡白濱人	寛政七年乙卯二月
三嶋榛山	對馬人	同前
園田良壽	豊後萩原人	同前
辻原英晏	豊後臼杵医員	同三月

河村泰純	同 白杵医員	同前
本間春伯	遠江掛河人	同前
上瀧典司	筑後御井郡中島村人	同五月
古館尚敬	肥前唐津呼子人	同前
直川元倫	肥前唐津人	同八月
田尻壽齋	玉名郡小天人	同九月
海士野友賢	改名有謙 豊後海部郡岩屋川村人	同前
吉村宗謙	安藝広島人	同前
宮崎春隆	筑前穂波郡阿恵村人	同十月
本多惇太郎	改名成惇, 島原医員元良子	同八年丙辰三月
梅邨君續	島原有家村人	同四月
山田圓次	天草郡福連木村人	同前
堀 祐次	改名官壽, 豊後野津村人	同九月
緒方松壽	下益城 安壽弟	同九年丁巳正月
本田 弘	十禅寺邨人 以寛政九年丁巳正月入門, 山王社々司兼医, 今改名但馬守	
小坂延壽	宗壽弟	寛政九年丁巳正月
風藤文啓	豊后白杵海士野友監弟	同前
一瀬東吾	島原有家村人	同四月
島原玄谿	日向諸縣郡本庄村人	同六月
岸 玄竹	改名高壽, 伊豫巖木嶋人, 為和州多武峯医	同九年丁巳六月
西 宗元	球磨医員西道庵子	同閏七月
西邨道敬	後姓名改島田元叔, 長門豊浦郡岡牧村人	同九月
繫 泰察	後改黒木大亮, 豊後日田人	同前
小田宗郁	長門萩府人	同前
松村玄壽	後改元珠, 八代医	同十年戊午二月
山田松達	豊後白杵長小野村人	同三月
宮内孝節	薩摩鹿兒島医	同七月
高橋恒壽	小島町人	同九月
古庄梅壽	詫摩郡長嶺村人	同前
魚返啓太	後改溪中, 詫摩魚返敬意子	同十一年巳未三月
和田宗順	後改松育, 日向延岡医員	同前
佐藤祐次	日向延岡医佐藤元幹子	同前
江崎鴻壽	天艸本戸組大多尾邨人	同五月
末村文喜	長門厚狭郡宇部邨人, 兄藤田伯祐以師事吉益修夫故不行束脩	同前
浦上禮太郎	下益城郡中山手永休見村 ^(安)	同前
磯野元榮	嶋原有家邨人	同前
香取文仲	長門長府医員	同前
横尾静安	肥前佐賀医員	同九月

緒方文仲	備後福山医員	同十月
橋本謙益	玉名郡南関邨人	同十二年庚申正月
竹崎文庵	宇土侯医員竹嵩玄胥	同二月
楊 宗英	宇土郡波多邨人	同十一年己未七月
曾木仁呂久	豊前中津下毛郡青邨人	同八月
鷺山盛彌	薩州甌島人	同十二年庚申二月
池田亮伯	八代徳瀨町人 享和三年癸亥繼龜谷某家，改龜谷養益，後改久膳	同三月
福原三省	長門下関南部町人，享和元年辛酉五月長門府臣山賀甚平 養為嗣子故，改姓山賀	寛政十二年庚申三月入門
林田愛之助	改名元鎮，天草牛深組茂串村人，以寛政十二年庚申三月入門， 同年十月客死，于熊府葬蓮光寺	
武元松太郎	改名壽候，天草本戸組小宮地邨人	同前入門
藤野哲庵	豊後速見郡古市邨人	同四月
朝倉鶴壽	豊后速見郡濱脇村人	同前
山田文郁	同 海部郡長小野村人	同十二年庚申閏四月
片寄道長	日向延岡医員片寄堅道子	同前
小林守太	豊後佐伯人士	同前
三松梅洞	改名齋壽，豊後日田郡豆田人	同九月
秋永宗壽	肥前鹿島人	
森田元醫	豊后府内医員森田正賢弟	同十二月
酒井清庵	天草御領組下河田村人	寛政十三年辛酉二月
松尾伯祐	肥前唐津領大河野人	同前
真木三折	肥前佐賀寺井町人	享和元年辛酉三月
田中元瑞	筑後久留米領小野町人	同前
甲斐 匡	豊後速見郡別府村人	同前
古庄静齋	長嶺邑人，古庄梅壽弟	同前
中山元民	鶴崎人，中山養元弟	同前
大谷道長	肥前唐津医員	同四月
内藤桂壽	玉名吉地村人	同前
牧 玄適	日向延岡領豊後大分郡新貝村人	同前
福原裕益	後改伯亮 長門下関東兩部町人	同元年辛酉五月
河野元俊	筑後柳河竹井村人	同九月
佐方仲猿	八代郡野津手永鏡村人	同前
後藤玄意	豊後大分郡尾津留村人，後藤圭鈴弟	同十月
柴田龜齋	肥前唐津領呼子邨人	同前

卷之三

平江惟中	下益城廻江手永木原村人	享和二年壬戌正月	
井上文岱	上益城甲佐手永岩下町人	同前	
植邨鼎太	同郡上早川村人	同前	
三浦益壽	下益城辯壽弟，後為辯壽養子	同前	
河邨純甫	故弟子河邨泰純養弟，豊後臼杵医員	同三月	
山川元叔	後改道砥，筑後柳河医員山川意春子，住渡瀬	同前	
久形元雄	豊後千歳人	同前	
奥村壽太郎	改名元慎，肥前島原有家邨人	同前	
太田道益	肥前嬉野町人	享和二年壬戌四月	
本多元敬	肥前島原医員	同前	
水田元秀	肥前唐津領名護屋邨人，以享和二年壬戌五月入門，同三年客死于熊府	同前五月入門	
後藤元達	豊後大分郡原村人	同前	
田中宗玄	宇土郡浦手永戸馳村人	同前	
宮崎惟馨	下益城郡中山手永馬場村，郡医宮崎三折子	同八月	
谷田三順	下益城郡砥用手永下田邨人	同前	
渡邊敬助	近江速水庄高田邨人	同二年月日入門	離門
南部玄泰	肥前五島玉浦村人	享和二年壬戌八月	
渡邊若狭	上益城甲佐手永下早川村人	同前	
早野宗元	豊後臼杵医員	同前	
釘宮玄輔	豊後大分郡吉野宮尾村人	同前	
阿部文迪	豊后府内領萩原人	同十一月	
倉富元亨	筑後竹野郡森部人	同前	
岡本謙益	松橋人		
市野三壽	小川町人		
平木庸庵	筑後久留米領原古閑町人	享和三年癸亥二月	
高濱文壽	改名文哉，下益城廻江手永志々水村人	同前	
右田恪敬	筑前秋月人士	同三月	
松岡玄知	周防徳山医員	同前	離門
熊本原継	筑後三潞郡福光組横溝村熊本原仲子	同四月	
有田道貞	筑前怡土郡中津領波呂村人	同前	
西川玄仙	五島医員	同前	
釜屋峴溪	豊前英彦山人	同五月	
平井文庵	肥前平戸医	同七月	
竹下元龍	周防徳山領新町人	同九月	
深水宗古	葦北津奈木深水玄門弟	同前	
瀧井潜龍	葦北郡小田浦邨人	同前	
松本孝壽	上益城郡甲佐手永田口村ノ人	同十一月	

石地三徳	同 下横田村人	同四年甲子二月
宫内元清	薩州鹿兒島宮内孝節子	同三月
熊谷 昇	豊後日田隈町人	同前
秦 玄昌	筑後久留米領生葉郡吉井町人	同前
江藤阜民	筑前秋月医員江藤養泰子	同前
堀内三壽	球摩人吉医員堀内三怡子	文化元年甲子四月
松柴良節	筑前遠賀郡山鹿人	同前
武藤元哲	豊後臼杵医員河邨純甫弟	同六月
高見良貞	播磨加西郡富家村人	同前
野原平仲	豊後岡医員野原平若子	同八月
後藤駒吉	筑后久留米領御井郡野中村人	同前
速水大圭	同 御原郡小郡町人	同前
藤崎玄通	改名元禮, 近江彦根医員藤崎元慎弟	同前
小田良珉	豊後日出速水郡倉城村人	同前
西岡周禎	肥前佐賀医員	同九月
栗田春洞	豊後臼杵醫	同前
淺井典膳	備中玉島人	同前
梅谷左京	播磨高砂人	同前
桐生茂之丞	改名茂人, 豊后臼杵土人	文化二年乙丑二月
飯田文亮	筑前甘木町人, 本同邦秋月三島萬飢子	文化二年乙丑三月
河崎文庵	筑後竹野郡樋口邨人	同前
原田千壽	同 生葉郡能楽邨人	同前
池口仲恕	但馬出石人	同四月
竹崎宗参	八代医員竹崎淳節養子	同前
松田三壽	八代郡野津手永宮原町人	同前
石山惟克	出羽最上郡高玉邨人	同七月
松隈甫庵	肥前佐嘉医	同前
藤井俊民	筑後甘木馭人	同九月
迎 元叔	肥前神崎人	同前
上領養仙	長州長府人福原伯亮弟	同前
加藤春明	筑前穂波郡土師邨人	文化三年丙寅三月
西澤思道	後改台仲 江都足立郡與町人	同前
中島左明	豊前宇佐郡乙女村人	文化三年丙寅五月
宗像儀八郎	天草郡楠浦村人	同七月
齋藤泰元	同 大矢野村人	同前
荒木鞠壽	改名元鞠, 下ましき小川ノ人, 荒木元説養弟	同八月
太田勉逸	日向飢肥城崎人	同前
上田玄知	肥前唐津医員上田元同子	
清崎 均	下益城郡廻江手永藤山邨清寄桂壽子	文化三年丙寅十二月
寺井玄皓	改名元水, 摂州菟原郡御影村人	文化三年丙寅臘月

田尻元禮	熊本ノ人，田尻新益子	文化四年丁卯正月	離門，再許入門
土生玄忠	八代郡高田手永上野村人	同前	
小野棕壽	上益城郡鯨手永櫛島村人	同四月	離門
西島良碩	球磨人吉医員	同前	
伊東官司	豊后岡医員伊東博庵弟	文化四年丁卯三月	
川口省齋	筑後久留米領上妻郡津江村川口慶順子	同前	
中村壽柏	天草郡本戸組馬場村人	同前	
久保山文臺	天草郡御領組本村人酒井清菴弟	同前	
渡辺恒壽	下益城郡砥用手永津留村渡辺見壽	同前	
二宮玄安	豊後岡医員	文化四年丁卯四月	
嶋崎文叔	豊後玖珠郡中山田村人	同五月	
河野文中	筑後柳川原内村人	同九月	
河下世良	豊後速水郡渡脇村人	同前	
井村元龍	川尻小路町人	同十二月	
蓑田宗古	球磨人吉医員故門蓑田元弟子	文化五年戊辰正月	
高濱恵勉	下益城郡廻江手永志々水村人	同前	
田中見龍	肥前松浦郡南山村人	同三月	
谷川文仲	天草郡一町田組中田邨人	同前	
福島俊良	日州延岡医員	同前	
橋 玄圭	豊後玖珠郡町田村人	同五月	
但馬文澤	豊後大分郡吉野志都留村人	同前	
岡田仙達	越中富山人	同七月	
及川昌達	奥州仙臺水澤人	同前	
堀田仲禮	菊池郡河原手永隈府上町堀田見瑞養子	同前	離門
飯田大民	筑後久留米領御井郡江戸村人	文化五年戊辰四月	
大家龍文	肥前佐嘉郡寺井町人	同十月	
西藤玄淋	川尻外城町西藤元亮弟	文化六年己巳正月	
土屋立節	同 土屋立庵子	同前	
宮川慶太郎	筑後久留米領河山内村人，故門生大津玄龍子	同三月	
海士野玄壽	豊後臼杵海士野友謙子	同前	
松久見鱗	豊後臼杵医員	同前	
堀 正策	同 臼杵堀官需子	同前	
衛藤愛命	豊後竹田惠良原村人	同前	
池田宗慶	八代徳潤町人	同前	
杉田良白	長門長府人	同四月	
佐藤順哲	豊後森医員	同前	
五十君壽伯	高橋町人，故弟子五十君壽亭養子	同五月	離門，再許入門
野中健益	肥前三根郡西尾 ^(島々) 村人原文親子	同八月	
松野大淳	肥前島原有家村人松野三英子	同前	離門
馬場 鼎	肥前島原堂崎人馬場宗庵子	同前	

本多元良	肥前島原医員本多白水子	同九月
三宅玄博	肥前島原人	文化七年十一月
岩本原博	葦北水俣人	文化六年己巳十一月
三原道慶	改名準吾, 日向本庄人	同前
小池珍臺	天草郡町山口村人	同九月
魚沼文助	越後魚沼人	同前
小坂政太郎	後改政壽, 小坂宗壽次子	文化七年庚子三月
森多文龍	豊前小倉領八屋邨人	同前
佐谷玄松	筑前秋月医員	同前
大平三平	備後福山神島町人	同前
梅津安遷	肥前島原隈田村人	同前
二宮仲悦	改峻恵 豊后岡医員	同前
面高医仲	薩州河辺郡加世田人	同五月
穂波 貢	藝州忠海東町人	同前
土屋良策	豊前小倉医員	同八月
徳永貞記	上益城甘木村人	同十月
平城桂壽	日向宮寄郡柏原村	同前
首藤見昌	豊後大分郡戸次人	同前
志村壽菴	同 丹生人	同前
橋本秀作	同 戸次人	同前
黒瀬道遠	筑前糟屋郡乙犬村人	文化八年辛未閏二月
喜多原雄輔	豊前京都郡苅田村人	同三月
松田玄良	長門長府人	同前
小崎玄洞	豊後竹田領直入郡玉来村	同前
菅原良朔	筑後久留米領小頭町人菅原一甫子	同四月
葛木玄意	豊后竹田領大野郡大迫村人	同前
大内玄鶴	豫洲松山人	文化八年辛未四月
山内啓越	大隅曾於郡国分人	同六月
峯 静軒	肥佐賀領松浦郡伊萬里人	同前
奈良崎宗仙	肥前唐津領松浦郡有浦人	同前
伊藤大蔵	紀州和歌山小野町人	同九月
西 元禮	肥前長崎浦上村人	同前
瀧井宗賢	葦北郡北田浦村人	同前
杉山青雲	筑前秋月領嘉麻郡内山田人	同十月
赤松良造	播州多可郡安田村人	同十一月
山口玄東	備後御調郡尾道久保町人	同九年壬申七月
池松新平	丹波福智山人	同前
松村玄機	長州萩人	同九月
足立周造	丹波水上郡山垣村人	同前
森 玄筒	豊後岡医員	文化六年己巳九月

(頭注)「前ニ落ツ」

Chinju Murai (Kinzan) and Todo Yoshimasu

Noriko MATSUZAKI

Kumamoto University Medical Department Alumni Association “Yukyokai”

Chinju Murai (pen name: Kinzan Murai) is known as a physician of the Koho School, comprised of the students of Todo Yoshimasu. In the Horeki era, he developed the foundation of a medical school, Saishunkan, in the Kumamoto Domain as the eldest child of Kenboku Murai, the first professor of the school. However, since Kenboku died soon thereafter, he left the medical school to study as a student of Todo Yoshimasu in Kyoto. As a student of Todo, he made achievements, including the publication of many medical books. After the death of Todo, he established a school in Kumamoto to teach about the medical techniques that he had learned from Todo. In this report, we clarify the details of students of Chinju, based on the list of his students, which had not been known previously. In addition, we show that Chinju fulfilled Todo's hope for him to disperse Todo's medical techniques mainly in West Japan, as Chinju was originally from the Kyushu area.

Key words: Chinju Murai (pen name: Kinzan Murai), Todo Yoshimasu, the manner of Todo, student, medical book